

「GIC 第7回ガラス技術シンポジウム」参加報告

(一社) ニューガラスフォーラム事務局

Report on the 7th Glass Technology Symposium sponsored by GIC



(シンポジウム会場ビル)



(萩原 GIC 運営・技術委員長挨拶)

1. 経緯

ガラス産業連合会 (Glass Industry Conference) がガラス関連6団体で設立されて、今年で11年目となります。GICの大きな役割は、板硝子、硝子製品、硝子繊維、電気硝子、びんガラス、ニューガラスに共通する課題への取り組みです。そこで、学界とガラス業界との交流をより活発化させようとの目的で、「ガラス技術シンポジウム」を開催する事にしました。具体的には、日本セラミックス協会ガラス部会主催の「ガラスおよびフォトニクス材料討論会」の初日の午後に、共催プログラムとしてGICが設定したテーマに沿った講演会を開催します。また、「ガラ討」と合同でポスターセッション、研究室紹介、懇親会を行っています。初回の滋賀県立大学以降、東京理科大学、豊橋技

術科学大学、東北大学、京都大学、東京大学と巡って、今回は11月24日(木)に兵庫県立大学が幹事で開催しました。

当日の参加者は約200名と盛況でした。講演会の冒頭に、萩原太郎 GIC 運営・技術委員長 (HOYA 執行役) の挨拶があり、次いで、シンポジウム WG の前田敬主査 (旭硝子) がシンポの概要説明を行いました。その後、菱沼晶光委員 (日本板硝子) の司会のもとで5件の発表が行われました。

当フォーラムでは、丸山勉企画部長がシンポジウムの事務局を担当して準備を進め、ポスターセッションでは、当フォーラムのガラスデータベース「INTERGLAD」と共に、「ガラス産業連合会の活動と Topics」, 「ガラス産業技術戦略2030年」及び「ガラス製造プラント百科」(資料集)の展示を行いました。

2. 講演テーマと講演者

講演のテーマは、初回が「ガラスの破壊・強度」、次いで「環境とガラス」、「環境負荷の低減に向けて」、「ガラスと表面」、「エネルギーとガラス」、「リサイクル技術とガラス」と続き、今回は「評価・解析・検査技術の今昔」のテーマで次の5つの講演が行われました。

- ①「ガラスの評価解析技術-最近の取り組みから」(矢野哲司・東京工業大学准教授)
- ②「X線・電子線を用いたガラスの欠点・表面分析」(酒井千尋・日本板硝子)
- ③「検査機技術の変遷と展望」(中山博・キリンテクノシステム)
- ④「割れ問題解決, 強度向上のための破面解析」(小野俊彦・コーニングホールディングジャパン合同会社, コーニング研究所)
- ⑤「Spring-8の高輝度放射光を用いてガラスの構造を調べる」(梅咲則正・高輝度光科学研究センター)。

ポスターセッションでは、GICからは、次の会社・機関が参加しました。(1)日本硝子製品工業会 (2)板硝子協会 (3)日本電気硝子 (4) 東洋ガラス(5) 旭硝子中央研究所(6) セラミックフォーラム(7) 東京工業大学(8)豊橋技科大・旭硝子 (9)日本板硝子・岡山大学大学院 (10)島津製作所・島津総合分析試験センター(11)日立ハイテクノロジーズ(12)日本電気硝子・大阪府立大・

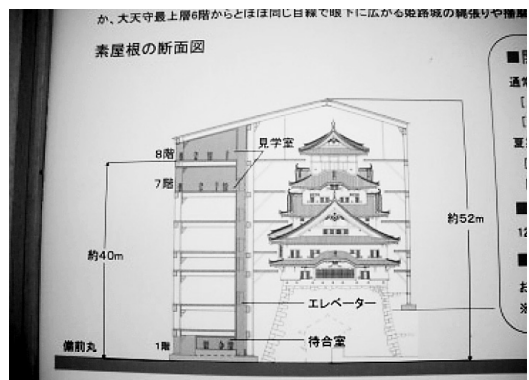


(ポスターセッション風景)

滋賀県立大(13)東洋佐々木ガラス(14)ガラス繊維協会

3. 余話

いつものように、品川駅で“なだ万”の弁当を買いこんで「のぞみ19号」に乗り込み、12時直前に姫路駅に着きました。会場である姫路城の真ん前の絵ガラス張りビル「イーグレ姫路」(写真)までは徒歩10分ほどでした。シンポジウム開始の1時までには時間がないので、この記事用に会場ビルの写真を撮り、そのまま大急ぎで姫路城の大手門に入って、三の丸広場から姫路城を遠望しました。ところがガッカリ。姫路城天守は、昭和の大修理から50年近くが経過したため、汚れのはげしくなった白漆喰壁の塗り直しや屋根瓦の葺き直しなどで、平成21年度から26年度まで5年をかけた本格工事中でした。そのため、城全体がすっぽりと作業用足場カバーで覆われていてその姿は見えません。それは8階建ビルの高さの姫路城全体を覆う巨大なカバーです。なお、作業用足場の7、8階に見学施設が設けられており、“天空の白鷺”と呼ばれています。そこからは、間近に修理工事が見学できるよう。私は、通産省入省時の研修旅行の帰りに、大阪万博には行かず姫路城を見学して以来の訪問でした。「天空の白鷺」見物は、次の楽しみです。



(姫路城広場の修理説明図)